HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代ウズベキスタンにおけるドゥアー
Author(s)	庄司, 翼
Citation	日本中央アジア学会報, 14, 42-44
Issue Date	2018-07-31
DOI	10.14943/jacas.14.42
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88346
Type	article
File Information	JB014_010shoji.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

現代ウズベキスタンにおけるドゥアー

庄司 翼

ドゥアーについての定義はいくつか存在し、その意味範囲はドゥアーを扱っている文脈ごとに異なる場合が多い。

日本国内の学術的な環境における一般的な理解としては、ドゥアーを「定めの礼拝の他に行われる自由な祈り」[大塚 2002: 664] とするものである。様々な規則があり様式化されている定めの礼拝（サラート、ナマーズ）と比較し、ドゥアーを個人的かつ自由な祈りであるとしている。この意味ではサラート以外のイスラームにまつわる様々な儀礼がドゥアーに含まれうる。

一方で、現代ウズベキスタンにおける権威的なウズベク語辞典 [Мадвалиев 2006: 665] では「神に請い、自身もしくは他者のために良いことを希望すること」といった内面に着目した定義に加え「ファーティハ（fotiha）で読まれるクルアーンの章」のように、章句そのものをドゥアーとする定義も加わる。ここでは、祈りという動作をドゥアーとしているのではなく、その内面の在り方（希望すること）と祈りの際に読まれる文章（クルアーンの章句）の両方がドゥアーであるとされている。

また近年出版されたイスラーム百科事典 [Мансур 2017: 148] では、宗教的な立場よりドゥアーを二種類に分類し、以下のように説明する。すなわち、クルアーンやハディースなどの宗教的な源泉に出典を見出すことのできる文言で行われるドゥアーは マアスーラ、それらによらず自由な文言で行われるドゥアーがムフタラーである。そのうえで、マアスーラのドゥアーに関してはその文言を間違えぬことが大事であるとし、ムフタラーのドゥアーに関してはアッラー以外の対象に対して「子供を得る」「病を癒す」「災難や死から自らを守る」「公平や正義を求める」などの願いをかけることで多神崇拝に陥ってしまうことを戒めている。また、ドゥアーを行う際の精神的な在り方にも言及し、それが単なる願い事とならぬよう注意を促している。

一方で民族学の立場からは、シャーマニズム的な要素も含んだドゥアーにウズベク民族の民族性が現れているとした研究 [Мирзаева 1993] も残されている。この研究では特に詩か

ら引用したドゥアーなどにも触れており、ドゥアーとされるものの中には抒情詩、叙事詩などに分類可能なものが含まれることが指摘されている。

現代ウズベキスタンの街中で実際に目にするドゥアーとしては、旅行のドゥアーと台座の節を挙げることができる。どちらも身の安全を請願すべく読まれるものであるが、クルアーンに出典を求めることのできるドゥアーであり、先程の分類で言えばマアスーラである。そのことからも分かるようにこのドゥアーは全てアラビア語であり、このドゥアーを読むにあたってはウズベク人であれアラビア語で話すことが求められる。これは多くの人にとって容易ではないため、このようなドゥアーは本などでは拡張キリル文字での転写が併記されている。

以上からも分かるように、「ドゥアー」には出典を異にする多くのタイプがあり、それがどのような性格のドゥアーであるかは実際に聞いてみるまで判然としない。加えて、クルアーンやハディースに典拠を持つマアスーラの場合はドゥアーそのものがアラビア語である場合が多く、アラビア語を解さない多くのウズベク人にとっては、そのままでは理解することのできない呪文のようなものにならざるをえない。その際は宗教的な知識人によるドゥアーの説明や、何らかの出版物から得られる情報を信頼せざるをえないということになるが、その過程で宗教的な権威は重層的となる。故にある人がどの部分を主たる宗教的権威として信頼しているのか、言い換えれば何を根拠としてその効力を信じられるのかを探るのは単純なことではない。

一方で、ドゥアーは基本的に自由な祈りであり、時代の流れの中で絶えず人々による増減や改変を繰り返しうるものである。それ故にドゥアーをどのように行うかということには、それを行う個々人の宗教観が反映されるのではないかと考えられる。したがってドゥアーを人類学的に分析していくにあたっては、どのようなドゥアーを行ったのか、誰からそれを学んだのか、それを行うことにどのような意味があるのか、などを丹念に見ていくことが大切になってくるだろう。

参考文献

（日本語）

大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店。

（ウズベク語）

Зиёуддин, А. 2011. *Катта дуо ва зикр китоби*, Тошкент: Шарқ.

Мадвалиев, А. ред. 2006. *Ўзбек тилининг изоҳли лугати, Биринчи жилд А-Д*, Тошкент:

«Ўзбекистон миллий энциклопедияси» Давлат илмий нашриёти

Мансур, А. ред. 2017. *Ислом энциклопедия: А-Ҳ*, Тошкент: «Ўзбекистон миллий энциклопедияси» Давлат илмий нашриёти

Мирзаева, С. Р. 1993. *Ўзбек халқ афсун-дуоларининг жанр хусусиятлари ва бадиийлиги*, Тошкент: Филология фанлари номзоди илмий даражасини олиш учун тақдим этилган диссертация автореферати

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）